

## 新刊

□秋月俊幸(編): **書簡集からみた宮部金吾** B5. 310 pp. 2010. ¥4,700 + 税. 北海道大学出版会. ISBN 978-4-8329-6719-9 C3023.

宮部金吾博士は受け取った書簡類を、発信者別に分けて大切に保存していた。彼の死後、それらは北大農学部と宮部家に残されたが、1990年に宮部家所蔵の遺品が北大に寄贈されたのをきっかけに、家族関係をのぞく全書簡の整理が行われた。その数は3,233通、発信者は約800人である。

これらは1. 博士の旧友、2. その他の日本人、3. 絵はがき、4. 外国人と仕分けされ、それぞれ発信者の50音順、ABC順に配列されている。各書簡は整理番号、発信年月日、発信者、宛て先、内容、備考の項目があり、内容欄は書簡の要約ではあるが、単なる挨拶状や会議の案内まで記録されている。備考欄には封書、葉書の区別、ペン・筆の別、枚数、巻紙なら長さなどが記録されている。外国人の場合には言語の別、ペンかタイプか、に加えて、内容はすべて和文に翻訳してある。中には達筆すぎて翻訳できなかったものもある。

付録として、「マキシモウィッチ氏生誕百年記念会」一件資料があり、その出欠通知では本州関係者のほとんどが欠席となっている。これについては、まえがきの中で当時の情勢について言及されている。

この書簡集は、単なるリストではない。私信なので、かなりプライバシーに立ち入った記述や表現があり、推理小説のような読み物として十分利用価値がある。だれかの書簡に他人の名前が出ていれば、「言及された人は当時どんな態度をとっていたのか?」と、その人の見出しをのぞいて見たい。一方、「宮部博士はこの書簡に対してどんな返事を書いたのだろうか?」と、探してみたい。しかし宮部氏の書簡は広く散らばってしまっているので、こういう書簡集が多くの人について作られない限り、調べる術はない。

この書簡集に扱われているのは1877年(明治10年)から1950年(昭和25年)の範囲だから、もはや「歴史」の領域に入るものだろう。わが国の生物学の発展を跡づける重要な資料として、評価されることだろう。そういえば、伊藤篤太郎氏も来信を整理して保存しておられたことを、かつて国立科学博物館の資料で見た記憶があるが、私

にはそれをこのようなリストに作り上げるほどの情熱を持てなかったのは、能力の差という他はない。

発信者の見出しには、その生没年、略歴、業績が表示されていて、これだけでも有用な情報である。(金井弘夫)

□いわさゆうこ(著)、八田洋章(監修): **どんぐりハンドブック** 18 × 11 cm. 80 pp. 2010. ¥1,200 + 税. 文一総合出版. ISBN 978-4-8299-1176-1 C0645.

植物をテーマにした図鑑や絵本の著述が多い著者の作品で、かつて「どんぐり見聞録」を紹介したことがある。本書はハンディー図鑑風で、15頁までがドングリをつけるブナ科植物の、いろいろな観察点が説明されたうえ、ドングリや葉による一覧表で区別点を述べたのち、見開き2頁ごとに一種類のドングリとその生育状態のカラー写真が22種類について盛り込まれている。最後の7頁には、ドングリの生活史や食べる・染めるなどの利用法も簡単に解説されている。野外で使うにはこのくらいがよいだろうが、盛り沢山ですべて圧縮されているので、「もう少し...」と思う人のために、巻末に16件の参考資料が掲げている。

(金井弘夫・矢川 憲)

□広沢 毅、林 将之: **冬芽ハンドブック** 18 × 11 cm. 88 pp. 2010. ¥1,200 + 税. 文一総合出版. ISBN 978-4-8299-1174-7 C0645.

冬芽から植物の種類を調べるためのハンドブック。冬芽の図鑑はいくつか出版されているが、実際、野山に持ち歩くには、この大きさぐらいが手ごろだろう。このハンドブックの特徴は検索表にあり、冬芽を、まず、とげの有無、つる性か、枝先が極太かで見分ける。次に、冬芽が対生か、互生かで分け、その次に枝先の太さと芽鱗の多少とで分類する。

巻頭に検索表に基づき分類された冬芽写真の一覧が付いているので、事前にこれを勉強してから、冬山に出かけると良いだろう。この巻頭の冬芽写真の一覧が良くできているので、できるなら大きな版で見たかったところだ。B5版ぐらいで、薄い冊子にしていただけなら、持ち歩くにも苦にならないし、鑑賞用にもなるだろう。(近藤健児)